

良心を育む

奨励	内山 伊知郎〔うちやま・いちろう〕
奨励者紹介	同志社大学心理学部長・心理学部教授
研究テーマ	乳幼児の認知・感情発達の研究

神よ、わたしの内に清い心を創造し
新しく確かな霊を授けてください。
御前からわたしを退けず
あなたの聖なる霊を取り上げないでください。
御救いの喜びを再びわたしに味わわせ
自由の霊によって支えてください。

（詩編 五一編一二―一四節）

同志社と良心の哲学

本日はこのような機会を与えていただきましたことを感謝いたします。
日頃、私は発達心理学の研究に携わっております。健やかな発達を支援するために、誕生後間もない乳児から、高齢に至るまでの心の発達を研究しています。今日は、同志社の大切にしてきた良心について発達心理学の視点からお話をさせていただきます。
さて、皆様は一八七五年に同志社英学校が設立された時の八名の学生のうち、誰が印象に残っておられるでしょうか。

心理学の世界では、同志社英学校開設当時に最初の学生であった元良勇次郎が日本の心理学をつくったということで有名です。元良は、英学校開設当時、学校運営に尽力したデイビス宣教師から聖書と英会話を学び、ジョンズ・ホプキンス大学で心理学を習得後、帰国し、一八九〇年には東京帝国大学の教授となり、心理学講座を開設しています。
また、同じく最初の学生のひとりに中島力造がいます。中島力造は、イエール大学で博士号を取得後、元良と同じく東京帝国大学の倫理学の教授に就任しています。
さらに若い学生ですが、大西祝がいました。大西は小学校卒業後、すぐに英学校に入学しましたので、元良や中島と同じ頃の在学ですが、年下の学生でした。大西は新島襄より受洗し、同志社英学校神学科を卒業後、東京帝国大学文学部にすみ、一八九〇年に大学院の卒業論文に「良心起源論」を著わそうとしていたことは、元良から大西にあてた書簡に残っています。元良や中島は海外で学び、いち早く教鞭についていたわけです。大西は、同志社英学校、東京帝国大学と進み、その後、早稲田大学の前身である東京専門学校の講師となっています。

良心の発達

このように、新島のもとでキリスト教を学び、のちに良心を哲学的に論考した大西は、良心の概念を日本で確立した功績者と言えます。
大西は、良心の発達について、「本来の目的を見ることの正しくなるに従い、我良心の為すべし為すべからずと命し、善なり悪なりと判することの正しくなる」と述べています。また、「本来の目的を見る範囲の広くなるに従い、未だ良心作用の反応せざりし事柄にも、その作用の範囲の広くなるに従い、反応するに至るべし、是れ亦その発達の一部」としています。さらに、「良心の全く反応せざるにはあらざれども、その反応の程度の至りに微弱なるの有様が漸々強く、鋭く、明になること」とも著しています。
つまり、良心の発達とは、ものの本質を見る能力が高まるにつれ、善悪の判断が正しくなり、良心の行動が強く鋭くなることであるというわけです。
心理学の世界では、発達心理学の父といわれるスイスの研究者ピアジェが一九〇〇年代前半に登場します。ピアジェが道徳発達について有名な理論をたてるのですが、大西がそれより先に良心の発達について述べていたのは驚きと同時に同志社人として誇りです。
ピアジェは子どもを観察して、四歳までの子どもは、たとえばトランプをしていても単にトランプを捨てるというような規則の真似事をするに過ぎないと言っています。五歳になるとルールを理解し、それは大昔から決まっていたように絶対に服従をするようになります。この頃が規則を一番しっかりと守る時期です。
しかし、小学校の高学年になって認知的な発達が進むと、ルールは皆で作ったものだから、皆が了解すれば変えることができるということを理解します。そうしますと、必ずしもよい方向への改革ではなく、自己中心的に「赤信号も皆で渡れば怖くない」という発想がでてきます。これは大西が言うように「ものの本質を見る能力」がうまく働かないことによるのです。

道徳発達の心理学

大西は、良心について、さらに述べています。すなわち、行為の決行前の良心現象と行為の決行後の良心現象についてです。行為の決行前には「してはいけない」という禁止、あるいは「しなければならない」という奨励の意識があります。子どもが路端で泣いていれば、そのまま立ち去ってはいけない、助けてあげなければならないというわけです。そして、同時に善悪の区別がつかないといけません。すなわち、何が正しく、何が悪いことであるかを知ることです。そうしめんと、善ではなく悪の行為をしなければならないと、誤ってしまうからです。
これは、現在、道徳判断と言ってさまざまな研究が進められています。ピアジェによると道徳判断では、華やかな結果に目を奪われるのではなく、その意図をよく読み取ることが重要になります。たとえば、お母さんの手伝いをしていて皿を三枚割ってしまった子どもと、横着な遊びをしていて皿を一枚割った子どもとでは、どちらが悪いと思いますか。皿を割った枚数で言えば、三枚割った方が悪いと言えます。しかし、なぜ割ったかを考えると、母親の手伝いをしているより横着なことをしていた方が、悪いと言えます。割ったという結果の大きさだけでなく、行為をした原因をよく考えて判断をすることが大切です。最近、パフォーマンスを重視しますので、すぐに結果の大きさによって判断をしてしまいがちな世の中ですが、その行為の本質を見極めることが大切です。
それでは、大西は、行為の決行後すなわち行動をしてしまった後の良心の働きについては、なんと説明しているのでしょうか。義務を果たした場合の平安な気持ちと、義務を果たさなかった場合の不安の気持ちを対比して挙げています。これは、現在では罪悪感と言っています。罪悪感とは悪いことをしたので謝りたくなるような後悔の気持ちのことです。最近ではこの感情に関する心理学的な研究が盛んに行われるようになり、自己意識感情と名付けられています。自己意識と呼ぶのは、自分自身に内在化する基準が重要な働きをするからです。
現在の心理学の研究成果から、罪悪感とは反道徳的な行動を抑制する効果をもつことが実証的に明らかにされています。また、罪悪感とは他の人に迷惑をかけたり、義務を果たさなかったりすることによって生じるので、他の人の気持ちを理解し、共に感じることと関係しています。これは共感性と言います。

共に知ること

そもそも良心という言葉は、その語源に「共に知る」という意味があります。他者と共に知るというのは、自分だけの視点に立たず、他者の視点を取り入れて世界を共に感じて共有すること、そしてさらに神と共に世界を共有することです。
発達のには、二歳半くらいで他者の気持ちを考えた行動が見られるようになります。
たとえば、友達と遊んでいて、その友達が泣いたとすると、二歳の子の場合、自分がなぐさめられる自分の母親の元に、その友達を連れて行きます。しかし、二歳半を過ぎると、その友達がなぐさめられるその子の母親の元に連れて行きます。このように、その友達の気持ちを考えて、共感することができるわけです。
子どもの共に感じる能力は、いろいろな要因によって発達します。
まず、一つは、周囲の人を模倣することです。幼いときから、世界を取り入れるために周囲の人の行動の真似をします。子どもは真似をする天才です。どんどんと真似をしていきます。ですから、話を始める前の子ども時代から周囲の者は気を付けて模範的な行動をしないとイケないのです。
また、子どもは保護者とともに世界を感じます。たとえば、犬の嫌いな母親と歩いている子は、犬と出会ったとき母親が怖れるのを見て、自分も怖れるようになります。また、困っている人を見て、かわいそうに感じる様子は子どもにも敏感に伝わります。子どもは、親からのちょっとした情報を上手に取り入れ、世界の様子を知るわけです。
それから、連想という現象も重要です。他者が置かれている状況、たとえば、人が転んだというような場合、自分が以前転んだときの体験と連合し、その人と気持ちを同一にできるのです。

良心を育むために

このように人の気持ちを通して世界を知することは良心の行動を行うために重要です。
それでは、良心を育むための子どものしつけの仕方について、考えてみましょう。
保護者からのしつけには、大きく分けて三種類あると言われます。一つは、強圧的な、強引に要求を押しつけるしつけです。このような場合、子どもは自分で考えられない周囲の顔色を見て罰を避ける行動をする子になりがちです。

次に、何もしない放任的なしつけがあります。この場合は、よい手本がない環境で育つことになるので、自らがよほど自律しないと良心の構築ができないかもしれません。

他方、子どもに応答的に接し、理論的に子どもに行動の意味を説明するしつけをしていますと、適度な緊張感と知的な刺激から社会的に信頼のできる子に育ちます。

同志社の教育理念に掲げられている「自由主義」は、自らが考え行動する力を育むものです。また、「キリスト教主義」は、周囲の人の気持ちを理解するのみならず、高い精神性を身につけ、ものの本質を正しく見極める基礎的な資質となるわけです。

大西は、このような新島襄の教えをうけて良心を哲学的に理論構築したのだと思います。私が心理学において研究している道徳性や社会性の発達もこの考え方に沿っていることを知り、あらためて同志社の良心教育の先端性を感じている次第です。

この同志社で一国の良心とは何かを考え、世界を支える人材となっていたきたいと思います。私も同志社人として努力して参る所存です。

二〇一〇年六月二日 同志社スピリット・ウィーク
京田辺チャペル・アワー「奨励」記録